

氏名(国籍)	申 河 慶 (韓 国)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第4197号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	アポリアとしての「モダンガール」 —一九二〇～三〇年代の日本における女性, メディア, イデオロギー—
主査	筑波大学教授 博士(文学) 浜名 恵美
副査	筑波大学教授 名波 弘彰
副査	筑波大学教授 博士(文学) 宮本 陽一郎
副査	筑波大学講師 平石 典子
副査	京都教育大学助教授 博士(文学) 日比 嘉高

論文の内容の要旨

本論文の目的は、昭和初期に社会現象化する「モダンガール」を対象として、その言説編成のプロセスを文学または文化的交渉という観点から新たに考察することである。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章

第一部

第一章 「モダンガール」という言説空間

第二章 一九二〇～三〇年代の日本映画における「モダンガール」の表象

第二部

第三章 〈消費〉と「モダンガール」— 菊地寛『受難華』論

第四章 「日本美」を呼び起こす「モダンガール」— 江戸川乱歩『黄金仮面』論

第五章 女性身体の〈解剖〉と〈建築〉— 龍胆寺雄「魔子」と〈新興〉芸術派の周辺

第六章 「転向」と「モダンガール」の終息 — 夢野久作『少女地獄』論

第七章 越境する「モダンガール」— 小津安二郎『東京の女』における岡田嘉子像を中心に

結章 閉ざされる「モダンガール」をめぐる言説空間

序章は、先行研究を批判的に検討し、この分野の研究が抱えている問題を検証し、「モダンガール」、メディア、イデオロギーとの関係をいかに分析すべきかを検討している。

第一章は、「モダンガール」の言説編成を系譜的に整理し、この用語が関東大震災の大衆消費社会の形成時に出現した都市型の無定形な「大衆」を文化生産者たちが解釈していく言説編成の過程で成立したこと、「モダンガール」とはAと定義すればBの特性と矛盾し、Xと定義すればYの特性と矛盾するというアポリア的な存在であり、表象する側の認識の尺度を映し出す〈認識のアポリア〉として機能したことが論じられて

いる。

第二章は1920 - 30年代の日本映画における「モダンガール」の表象をとりあげ、それが言説空間における表象と同じ〈知〉の枠組みを共有するが、ジャンル、監督のスタイル、俳優の身体、テクノロジーの発達など、多様な映画製作の規制によって差異をみせ、文化産業としての日本映画が「モダンガール」の表象を通して、大衆の欲望やルサンチマンを読み取り、新しい意味を付け加えていったとする。

第三章は、『受難華』（『婦女界』1926年）をとりあげ、菊地寛が提示した「消費」の論理を内面化し、「家父長制」から解放された「モダンガール」は、保守陣営にもマルクス主義者にも批判されたが、それは両者の方向とは異なる「貞操」と「消費」の間のきわどい倫理の境界線で揺れ動く存在であり、資本主義倫理の定着が強い「家父長制」の変容を構造化しているとされる。

第四章は、日本／西洋、都市／農村などの対立軸によって議論された「モダンガール」言説がいかにか「日本美」を喚起したかを分析するために、江戸川乱歩の『黄金仮面』（『キング』1931-32年）をとりあげ、ルパンの恋人・不二子（＝富士子）の対極性（盲目的西洋追従者かつ「日本美」の象徴）が統合されないことに注目し、新たな「日本美」の発見をめざしつつ、まだ成功できない時期の複雑な大衆心理を捉えたテキストと位置づけている。

第五章は、龍胆寺雄の「魔子」（『改造』1931年9月）をとりあげ、女性身体への〈解剖〉と〈建築〉の眼差しに改めて注目し、〈アナロジー〉の概念を抽出し、解剖学・建築論・優生学等の「科学」言説が「モダンガール」の肉体美を造形する際に「文学」へ応用されたこと、〈新興〉芸術とは（社会主義を含む）「科学」精神に基づく未来社会建設をめざした運動だったのであり、彼らの描いた「モダンガール」は未来社会の新たな人間観、女性性だったことが明らかにされている。

第六章は、夢野久作の『少女地獄』（黒白書房、1937年）をとりあげ、「転向」と「モダンガール」の終息の関わりを分析している。『少女地獄』の重層的構成を貫く夢野の関心事のひとつは、メディアの質の変化への警告であった。新聞言説では1933年の共産党幹部の転向声明と三原山投身自殺事件は別々の認識枠で論じられたが、『少女地獄』では「家父長制」から「天皇制ナショナリズム」への移行という連動した現象として提示され、夢野はこの移行のひとつの原因をメディアが発信する情報の腐敗に見出し、これが社会の閉塞をもたらすと解した。この社会的封じ込めのもと、社会主義が天皇制を容認する一国社会主義に、女性運動が母性保護から優性思想に転向する中で、「モダンガール」の自立性は否定され、家庭内に閉じ込められ、それをめぐる言説空間は閉じられたとされる。

第七章は第六章で考察した「モダンガール」たちとは異なる〈道〉をたどる存在として岡田嘉子をとりあげ、小津安二郎監督の『東京の女』（1933年、松竹）は、「モダンガール」を表象するシステムである「蒲田調」および同時代の「封じ込め社会」の形成に抗するために作られ、映画におけるちか子像はのちに岡田嘉子がたどるソヴィエトへの亡命という「モダンガール」の険しい〈道〉を暗示しているとされる。

結章では、第一章から第七章までの成果をまとめている。

審査の結果の要旨

本論文が研究対象としている「モダンガール」は、近年フェミニズム・ジェンダー研究とカルチュラル・スタディーズによって改めて注目されてきた。本論文は、これらの成果を批判的に継承しつつ、〈認識のアポリア〉として機能した「モダンガール」が封じ込められる過程をメディアとイデオロギー分析を駆使して新たに解明した充実した研究である。

本論文の著者は、「モダンガール」言説を「大衆」論の文脈に置き直して考察しなければならないという立場に立っている。1920-30年代は大衆消費社会の形成とともに「大衆」の登場が明確に認識され始め、社

会主義運動の「プロレタリア」観と体制側の「皇民」観は「大衆」の解釈と獲得をめぐる〈知〉として形成された。「モダンガール」をめぐる言説空間はこの二つの強力な政治イデオロギーには収まりきれないさまざまな争点が、それらのイデオロギーと複雑にせめぎあいながら議論される〈場〉を形成した。本論文の著者は、この〈場〉を分析することでモダニズム期から戦時体制への移行を抑圧か抵抗かという一方向的な線としてではなく、より包括的でダイナミックな運動として捉えなおすことを意図している。本論文の各章の論述は一貫してこの立場から分析され、また、その分析と考察の結果もこの著者の立場を支持するものとなっており、全体としてまとまりのある論考となっている。

本論文が示した独創性は、社会科学的アプローチやフェミニズム・ジェンダー研究の成果を批判的に継承しつつ、大衆文化研究の枠組みからの新しい「モダンガール」研究となっていることである。本論文の著者は、「モダンガール」の論者はメディアを媒介することで、「大衆」の表象としての「モダンガール」をさまざまな角度から切り取り、その意味生成の過程に積極的に参加していく行為者として立ち現れてくると措定し、「モダンガール」の言説編成の分析において、メディア分析（作者－メディア間の交渉）、レトリック分析（作者が新聞・雑誌の言説をテキストに盛り込む際に行われる意味の変換）に分析方法の重心をおくことで「モダンガール」言説において展開された行為者間の文化的ヘゲモニーをめぐるせめぎあいの諸相を明らかにしている。また、本論文の著者は、一次文献・二次文献ともに充実した書誌目録からもうかがえるように、文化的コンテクストを見事に読んでいる。さらに、アナロジーで多要素を結びつけ、大衆消費社会及び天皇制ナショナリズムとの関連を探るなどして、通常の「モダンガール」論を超える優れた論文となっている。

本論文は、大衆文化研究志望の著者が、「モダンガール」言説と粘り強くとりくみ、それがメディアとイデオロギーにより重層決定される過程及び消失する過程を新たに検討した力論である。この点は高く評価できるが、本論文にはいくつかの欠点がある。第三章と第四章の完成度が必ずしも同水準ではなく、また十分とはいえない論理展開がないわけではない。しかし、このような限界は、著者の今後の研鑽に期待すべきものであり、「モダンガール」言説の考察として本論文の挙げた成果は学位論文として十分な水準に達しているものと判断される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。